

## 報道を盲信せず

### 自分の頭で考えよう

元空将 織田 邦男

中国武漢市に発した新型コロナウイルス感染症は今や全世界に蔓延し、終息の兆しさえ見えない。日本でも遂に緊急事態宣言が出された。

ワクチンも特效薬もなく、自覚症状がない感染者が感染を広げるといふ厄介なウイルスには、人の移動を制限するしか有効な手立てがない。我々は政府の方針に従い、

不要不急の外出は控え、マスクの着用、手洗いの励行等の自衛措置を地道に実行していかなければならない。

外出を控えると自ずと家でテレビを観る機会が増える。筆者はこれまでテレビのワイドショーなど、あまり観る機会がなかった。だが、今回じっくり観る機会を得て、テレビの役割について考えざるを得なくなった。

得なくなった。今は国家の危機である。危機に限らないが、メディアの重要な役割は、事実を正確に国民に伝えることである。危機の際には特に重要である。だが現実には必ずしもそうではない。

テレビのワイドショーでは、憶測に基づくことが断定的に報道されたり、根拠のない風評レベルのことがまことしやかに公共の電波で垂れ流されたりしている。この現実をみて危惧を抱くのは筆者だけではあるまい。

新聞は文字媒体で記録に残る。だが、テレビは言いっ放しで、一過性である。この特性が無責任さを生んでいるとしたら由々しき事態である。

視聴者は、テレビで放映されれば、真実と思い込んでしまう傾向にあるからだ。

ワイドショーではコメントーターと称する有識者が話題を解説するわけだが、自分の専門分野を語るのはいい。だ

が有識者として自分の専門外については一般人と変わらなない。専門外であれば当然、誤認識はある。だが、テレビで断定的に述べれば、視聴者はそれを真実と誤解してしまうから恐ろしい。



織田 邦男（おりた・くにお） 織田コン

サルタント代表、国家戦略研究所所長、東洋学園大学客員教授、日本戦略研究フォーラム政策提言委員。元空将。昭和二十七年生まれ。兵庫県明石市出身。四十九年、防

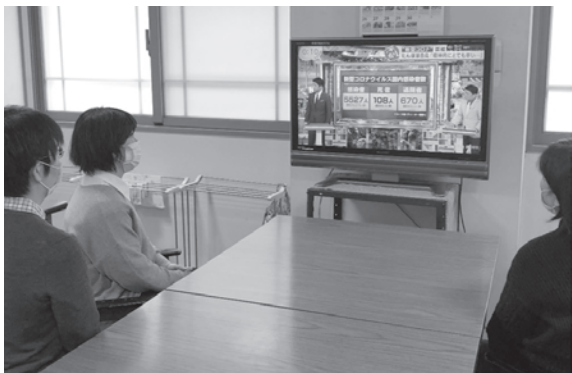
衛大学校卒業後、航空自衛隊入隊。五十二年、F4戦闘機操縦者として第六航空団（小松）に勤務。米スタンフォード大学客員研究員、第二航空団飛行群司令や航空支援集団司令官（イラク派遣航空部隊指揮官を兼務）などを経て平成二十一年に退職。同年から三菱重工防衛・宇宙ドメイン顧問に就任し、二十九年に退職。

本誌平成二十一年十一月号から二十七年三月号までペンネーム「宇佐静男」で『現代防人考』を寄稿。著作集・<http://aiming-high.web.fc2.com/archive.html>

例えば、感染症について専門的知見を有しないコメントーターが、専門家に対して国民の関心事を質問するのであれば問題はない。だが、感染症に全く素人のコメントーターが根拠もなく、思い込みで自説を断定的に述べるのは、あまりにも無責任である。視聴者はそれを真実と受け取り、誤謬が一人走りしてしまうことになりかねない。

それが政府の方針と異なる場合、視聴者は疑心暗鬼に陥り、感染症対策そのものを無効にしてしまう可能性さえある。

感染症対策は政府と国民が一体となって実施しなければ効果はない。場合によっては、国民をパニックに陥れる



仕事の休憩を利用して情報番組を観る女性

可能性さえある。  
関東大震災の際、デマ情報が横行して朝鮮人虐殺事件が発生したという。

### 前言を翻すひるがえ

危機に必要なのは「事実」であり「専門的知見」である。コメンテーターは自分の専門外のことについては、「分からない」と言う誠実さが求められる。

昨年十二月八日、中国当局は武漢市で新型コロナウイルスの初感染が確認されたと公表した。一月九日には、ウイルス検出と男性死亡を公表している。

そして十六日、日本でも初の感染者が確認された。二月十三日、日本での死亡例が報

告された。

ワイドショーでは、この時に至っても、感染症に全く素人のコメンテーターが「インフルエンザ並み」「過敏に反応すべきではない」「中国人観光客の入国を制限すべきではない」と断定的に述べていた。世界保健機構(WHO)の影響かもしれないが、結果的に重大な嘘を垂れ流したことになる。

二月二十三日、武漢市封鎖の報が入るや、コメンテーターは前言を訂正、謝罪なしに翻し、「政府は危機感が感じられない」「対応が不十分で後手後手に回っている」と批判に転じた。

あるコメンテーターは「政府の対応が不十分なのは、憲

が、こういう無責任な批判は危機管理上、全く意味がない。寝食を忘れて最善を尽くしている現場のやる気を削ぐだけであり、百害あって一利もないのだ」

この時、ワイドショーでは感染症や危機管理に素人のコメンテーターが、船内隔離があたりかまも人権侵害であるかのように批判し、いち早く下船させて隔離すべきと主張していた。だが、三千数百人を個別に隔離する快適な施設など日本国内にはない。この現実を無視し、井戸端会議よろしく勝手なことを言いたい放題だった。

クルーズ船対応が終結し、現場の状況が判明した今、内外の専門家は今回の船内隔離

法に緊急事態条項がないことをクローズアップしようとしているからであり、あわよくば憲法論議に結びつけようとする底意がみえる」といった陰謀論まで根拠なく主張する始末である。まるでワイドショーは野党の代弁者に成り下がったような報道ぶりであった。

### 評価された豪華客船対応

クルーズ船対応もそうだ。筆者は先月号でこう書いた。

「現場が最も情報を持っているのであり、現場しか分からないことも多い。『FEMAの原則』にあるように、現場に人員を投入したら、現場を信じ、全てを任せることが重要である。だが実際は、メデ

措置をやむを得ない適切な処置と評価している。これについても、コメンテーターからは、なんら訂正、釈明、言い訳、そして謝罪などない。まさに無責任な言いつ放しなのである。

PCR検査についても同様、無責任なコメントが横行した。ワイドショーでは「希望者全員がPCR検査を受けられるような体制整備を早急に構築すべき」と主張し、日本政府の対応を批判した。

希望者全員にPCR検査を実施した場合、患者が病院に殺到し、症状が軽い感染者までが入院することになる。そうなれば、本来治療が必要な重篤患者が医療を受けられなくなる可能性が生じ、医療崩

壊につながりかねない。これを防ぐため、ある程度のスクリーニングをした上でPCR検査を実施するというのが、専門家会議が出した方針だった。

だがワイドショーでは連日素人コメンテーターが「希望者全員がPCR検査を受けられるようにすべきだ」と主張した。スクリーニングなしに実施している韓国を絶賛し、「日本でなぜこれができないのか」「日本は遅れている」との非難一色で、「もうイライラする」と口汚く罵るコメンテーターもいた。

その後、韓国、イタリア、そしてアメリカなどが次々に医療崩壊を起こした。死亡者数を比較すれば日本の方針が

正しかったことが分かる。PCR検査はそれ自体が目的ではない。あくまで国民の命を救うことが目的なのだ。

コメンテーターが無責任なのは、この現実を見て、徐々に主張を修正し、前言を有耶無耶にしてしまふところである。「全員検査しろ」という話をしているわけではない」と、いつの間にか主張を変え、ついには「医療崩壊を起こさないことが一番大事。PCR検査をした方がいいかどうかは終わった話」とまで述べた。前言を訂正することは最後までなかった。

こういう無責任なテレビ番組は、国家の危機に際しては有害無益である。新型コロナウイルスの危険

性、クルーズ船対応、PCR検査、いずれについても素人の意見を断定的に報じたことはメディアの役割を自覚して

いない証左である。しかも発言の誤りについて、釈明も訂正も謝罪もなく、洞ヶ峠を決め込むのは、公共の電波を使用している責任感や誠実さが感じられない。

ある大学の教授は「若者達はワイドショーを完全に見放している」と語る。国家の危機において事実を伝える重要手段であるテレビがこれでは困る。

コメンテーターは自分の専門外については、憶測で自説を述べるのではなく、「知らない」と勇気をもって言う誠実さが求められる。複数の専

門家に専門的見地から意見を述べさせ、コメンテーターは国民の関心事について専門家に質問する。これがワイドショーのあるべき姿であろう。

今回もデマ情報によって、トイレットペーパーの買い占め事件が起きた。コメンテーターの無責任な発言が、同様のパニックや致命的な事態を引き起こすとも限らない。誤報があれば直ちに訂正しなければならぬ。

もし外部から誤りを指摘された場合などは、番組は真摯に受け止め、誤りであればその事実を公表して訂正、謝罪する誠実さが求められる。メソソを重んずるあまり、「報道の自由」を持ち出して頑なに修正を拒否するのはワイド

ショーの自殺行為である。

今回、ある専門的機関が報道内容の誤りを指摘した。だがワイドショーの反応は、とても誠意あるものとは言えなかった。

コメンテーターが「我々にだって誤りはある」と開き直り、「何故我々の番組だけ指摘するのか」と逆切れする始末である。これでは視聴者の信頼は得られない。

誤りを指摘した当該者は次のように述べている。「国民生活、国民の命に関わる問題ですから、違うのではないかという情報、誤解を招くような発言があった時は、適切に正しい情報を出していこうという考えからです。トイレットペーパーの買い占めも、デ

マ情報から起きてしまった事態です」と。まさに正論である。

今は国家の危機である。危機におけるメディアの役割は極めて大きい。テレビも例外ではない。

ワイドショーは、テレビの「一過性」に甘んじ、面白おかしく視聴率獲得に走るようなことがあってはならない。あくまでも「社会の木鐸」として国民に信頼される番組にならなければならない。

同時に、重要なことが視聴者にも求められている。我々視聴者はコメンテーターの発言を盲信するのではなく、先ずは疑ってかかることだ。そして自分の頭で考えることなのである。